

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：24720135

研究課題名(和文) イギリスの死生観教育にみるナショナル・アイデンティティの形成

研究課題名(英文) National Identity and Death Education in Britain

研究代表者

泉 順子(Izumi, Yoriko)

明治大学・商学部・専任教授

研究者番号：30440134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリスの初頭・中等教育で行われている人格教育としての死生観教育についてナショナル・アイデンティティとの関わりから検証することを目指した。複雑化する死の形態と個々人の死別体験の減少がみられるなか、児童生徒が様々な喪失体験を乗り越え成長するための準備教育として死生観教育は実践されている。また多様な価値観に配慮しつつ、複合社会にて共存することを深く考える機会ともなっている。

本研究ではイギリス国民をつなぐ大きな喪失体験となった3つの事件を検証した。そしてイギリスの死生観教育の現状と課題について文献資料をもとに検討し、死生観教育の一方法として読書が有効であることを多角的に考察した。

研究成果の概要(英文)： This study aims to examine how death education in Britain helps students confirm their sense of national identity as UK citizens.

Thinking of death in this pluralistic society draws students' attention to the diversity of faiths, through which it is hoped that the students will be more conscious of the rights of others and seek ways of living that promote harmony. The study investigates the social impact of three well-known accidents,

suggesting that they were treated as the greatest experiences of loss for the entire nation and that they inspired the people of Britain into confirming unshakeable solidarity as a single nation.

Then, this study describes the partial progress made in the field of death education in contemporary Britain. Furthermore, this study examines the way in which reading is effective for death education, conducted from various perspectives from different disciplines.

研究分野：イギリス文学・文化研究、死生学研究

キーワード：死生観教育 イギリス 文学作品 読書 ナショナル・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

世界に先駆けてホスピスを開設し、生殖医療やクローン技術でも先駆的な役割を果たしてきたイギリスであるが、死生観教育(死への準備教育)についての研究ならびに教育の歴史は比較的浅い。

1988年にサッチャー保守党政権が着手した教育改革によって初等・中等教育に死生観教育が人格教育の一例として導入され、この必要性和喫緊性は高まりつつある。その背景には、イギリスにおける宗教の多様化と世俗化、メディア報道による過剰なまでの「死」の氾濫と同時に矛盾するかのように日常生活から周縁化されていく個々人の死、医療技術によって可能となった延命、人智を超えた自然災害、そして想像力を絶するような惨劇がある。そして、このような複雑化する「死」に対峙する児童生徒たちの心を教育を通じて見守るだけでなく、彼らが死別をはじめとする様々な喪失体験を乗り越えて精神的に成長していくための援助がこれまで以上に求められてきたことが挙げられる。

加えて、人格教育の一部である死生観教育は「イギリス人とは何か」という昨今のイギリス社会が直面する深刻な問題とも密接に関わっている。キリスト教教育を中核に据えることが困難になり、多様な宗教観や実践に配慮することが求められる一方で、普遍的で現実的なプログラムによって複合社会の一員として他者と共存することの意味・意義を児童生徒に認識させることが重要な課題となっている。こうしたなかで死生観教育は「死」と「生」という普遍的かつ誰もが体験する現実的なテーマを軸に据えながら、児童生徒に他宗教(の死生観)への配慮や「命」をめぐる個人の役割や社会貢献などを考えさせる機会ともなっている。

2. 研究の目的

本研究ではイギリスの初等・中等教育で導入されている人格教育の一部としての死生観教育の在り方をナショナル・アイデンティティの形成との関わりから検証することを目指す。

とりわけ本研究では死生観教育の設置の背景と現状についての検証と、死生観教育における読書の効用とその必要性を考察することとした。そして複合社会であるイギリスが目指す公共性や共存性の意識の育成が死生観教育を通じて行われていることを明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

日本国内・外で入手可能な文献資料をもとに行った。多角的な視点から考察するために複合学際的なアプローチを進めることを心掛けた。

4. 研究成果

(1) 本研究では、イギリスの死生観教育にて取り上げられることの多い3つの社会的事件について検討し、これらがナショナル・アイデンティティをイギリス人に再認識させる事件でもあったことを明らかにした。3件の事件とは、ヒルズボロの悲劇(1989)、ダンブレン乱射事件(1996)、そして元皇太子妃であるプリンセス・ダイアナの葬儀(1997)である。

ヒルズボロの悲劇はイギリスのスポーツ史上、最悪の事件とされている。1989年4月15日にシェフィールドのヒルズボロのフットボール・スタジアムで起きた群衆事故である。F Aカップの準決勝の試合に訪れた観客がゴール近くの一部の立見席に集中してしまい、前方にいた観客が後方から次々に押し寄せる観客からの熱気と圧力のために意識を失い、死亡した。直立のまま瞳孔が開きチアノーゼ反応を起こしていたという。この事故により10歳から68歳までの94人が死亡し、766人が重軽傷を負ったが死者の多くが若者や子どもであった。

ダンブレン襲撃事件は1996年3月13日にスコットランドのダンブレンにある小学校で起きた銃乱射事件である。事件の20年ほど前から児童虐待の疑いがかかりボーイスカウト運営の認可を剥奪され、その噂で事業経営も不振に陥ったトーマス・ハミルトンがダンブレン・プライマリー・スクールに侵入し銃器を乱射し、結果として16人の児童生徒と一人の教員を殺害した。

この事件から4日後の「母の日」にはダンブレン大聖堂にて追悼式が行われ、エリザベス女王と妹のプリンセス・アンが出席した。同年の10月にはメモリアル・サービスが行われ、600人を超える追悼者とチャールズ皇太子が出席した。ダンブレン市内にはこの事件を記憶に留めるために大きな花壇が設置され、事件現場となった体育館は解体後メモリアル・ガーデンとして再生した。ダンブレン大聖堂には碑文彫刻師リチャード・キンダースリーによる石碑が身廊に設置された。

ダンブレン事件の翌年、1997年8月末に「人びとの妃(people's princess)」を目指したプリンセス・ダイアナを襲った突然の悲劇はイギリスのみならず世界中を驚かせた。そしてパリでの事故死から葬儀までの一週間はイギリス史でも類例のない体験として語り継がれることになった。

既に皇太子と離婚して王室から離れたダイアナではあったが、葬儀は「特別な人の特別な葬儀」という扱いで執り行われ、歴代のイギリス王の戴冠式および葬儀の場であるウェストミンスター寺院で行われた。この特別な葬儀のなかで注目したいのは、ロンドンを「地中海地域のように」変貌させた人々の光景である。見知らぬ者同士が抱き合い、涙を流して感情を露わにする光景は前代未聞であり、あまりに「非イギリス的」な振る舞

いとすらされた。伝統的に感情を抑え、唇を引き締めて涙を我慢することがイギリス人と美德されてきたのに対し、ダイアナ妃の葬儀で繰り広げられたのは、涙を隠さずに見知らぬ者同士で支え合う新しいイギリス社会の一面であった。しかもダイアナを取り囲む追悼者たちの多くは、社会の周縁に置かれた社会的弱者、女性、同性愛者、病者、子どもたちであった。彼女に心を寄せた人々の花束は130万本を超え、ダイアナの葬儀は「花の革命」と呼ばれた。

エリザベス女王はダイアナ妃の葬儀前日に初の生放送による演説を行い、そのなかでこの葬儀が「イギリス国民 (the British Nation) が深い悲しみと敬愛の念でひとつになっていることを、全世界に示すまたとない機会となる」と述べ、葬儀を通じてイギリス国民が団結し結束することを誓った。

これら3件の事件はいずれもイギリス全土を震撼させた喪失体験であるが、そこには共通点がある。どれも突然の事故であり、人々の日常生活の連続性に突如もたらされた断絶であった。さらに、幼い小学生から高齢者が巻き込まれた事件であった。イギリスでも非常に人気の高いスポーツであるフットボール、誰もが通う小学校、そして「国民のプリンセス」として親しまれ、連日のようにメディアに報じられていたダイアナ妃。すべて子どもから大人に至るまで幅広く人気があり、近い場面や存在である。こうした日常性の風景に、突然、死が不条理なたちで生じ、イギリス国民に大きな衝撃を与えた事件であった。

これら3つの事件は、すべて「第三人称態の死」を通じてイギリス国民が一体となって死を考える契機となったともいえる。「第三人称態の死」とは、フランスの哲学者V・ジャンケルヴィッチの有名な議論にある通りで、第一人称態が「私」の死であるのに対し、第三人称態の死は「彼らの死」、つまり無関係の他者の死、そして抽象的で無名の死、医学や人口統計の観点から分析・検討する対象などを指す。上記の3つの事件は、本来ならば無関係であるはずの他者の死が、国民全体にとって親しい存在やありふれた光景に生じたために、宗教や文化の違いを超越して、自らの死とつながった喪失体験である。エリザベス女王の演説が象徴的に示すように「イギリス人としての一体感」を再確認する機会ともなった。

(2) ヒルズボロの悲劇、ダンブレン乱射事件、そして元皇太子妃であるプリンセス・ダイアナの葬儀はその普遍性と日常性から死生観教育のなかで取り上げられることの多い歴史的事件となっているが、イギリスの初等・中等教育における死生観教育の実践例について文献資料をたよりに探してみると様々な課題が散見された。

イングランド(ロンドン、ミッドランド、

イングランド北部)にある200の小学校のなかで死生観教育を実践しているのは15%に過ぎなかった。一方ウェールズのワイト島では死生観教育が5歳から7歳までの必須科目として義務付けられており、詳細な授業方法も策定されている。人格教育の一部として死生観教育が含まれているために、教科内容は各地方局に任されており、導入にも地域で偏りが生じていることが分かった。

死生観教育の導入を遅延させてしまう精神的要因の一つには、イングランドの小学校の過半数が「死への恐れを軽減すること」を死生観教育の目標に据えていることが関連しているように考えられる。先行研究を通してみると、教師自身が過去の体験から解放されぬまま、トラウマを抱えていたり、死への恐怖を払拭できずにいるという報告が多くみられる。そうしたなかで教員自身がこの大きなテーマについて児童生徒の前で語り、彼らと問題意識を共有することが甚だ難しいという意見もあった。このような課題について、質の高い教員プログラムをもち、死生観教育の高い実践率を誇るオーストラリアのような国からの具体的な実践例を学ぶことも課題のひとつであるという意見も見受けられた。

このような課題がありつつも、学校で死生観教育を実践することの意義は、多くの先行研究で認識されている。特に、喪失を体験した子どもには、支えとなり、普段と変わらぬ生活を提供してくれる場が必要となる。学校はまさに安定と平穏の象徴であるべきで、死生観教育はこうした落ち着いた社会環境のなかで議論され、探求されることが重要であるという意見が多くみられた。

無論、児童生徒に死を考えさせることは時期尚早であるとか、縁起でもないという危惧する大人の声もある。だがその一方で、こうした問題を敢えて避けることが、結果として児童生徒の精神面と学力面に悪影響を及ぼすと懸念する意見も強い。悲嘆や自殺を語ることがタブー視されてしまうと、子どもが生と死について歪んだ見方を持ちかねないという考えもある。死を避けることはむしろ生と死について無神経になり、こうした尊い問題を軽視する傾向を増長してしまうという懸念も出ており、死について大人が子どもに寄り添いながら、両者がともに向き合うことが双方の精神的成長につながるという議論もある。加えて、子どもが死に関心を抱くこと自体は発達段階のなかでむしろ自然なことであり、必要ですらあることも留意したい。

また死生観教育が一種の準備教育であることにも意義がある。有識者がすでに指摘しているように、喪失体験が起きてから実践するのも必要だが、前もって死の向き合い方について準備することはまさに「児童生徒が社会人として独立する前に、社会生活にて直面すると予測される様々な責務、機会、そして経験についてあらかじめ学ぶような場を設

けること」というサッチャー政権の「1988 年教育改革法」の目標にあるように、成長への道標となる。死を通じて児童生徒は多様な信仰心や価値観があることを知り、他者の権利を尊重し、他人へのおもいやりをもつようになる。

体験知の低い子どもに準備教育を実践するうえで有効な方法のひとつが読書である。イギリスの死生観教育の第一人者であるバーバラ・ウォードによって作成されたテキスト *Good Grief* では、児童生徒向けに選ばれた書籍の一覧が掲載されている。その一作であるモリス・グライツマンの『クイーンとの2週間』(*Two Weeks with the Queen*, 2006) は、小児がんにかかった弟ルークを救おうとするコリンが奮闘する物語である。オーストラリアの家庭を突然襲ったのは、クリスマスに突然倒れたルークの病気であった。血液検査の結果、進行がんにかかっており余命いくばくもないことがわかると両親は長男を次男の問題から引き離すためにイギリスの親戚に預けることにする。この2週間の滞在中、コリンはルークの命を救うために「万能」のエリザベス女王に助けを求めることを計画し奔走する。計画は次々と失敗に終わるのだが、その間にゲイとの交流を深め、同性愛者（英語の俗語で「クイーン」）である男性二人の愛と死に関わりながら主人公自身が大きく成長し、大人の反対を振り切って愛する弟のもとに帰国するという筋立である。

オーストラリアから旧宗主国イギリスの女王に助けを求めに幼い子どもが飛び立つという設定もユニークだが、グライツマンは子供の世界に人種の多様性だけでなく、性と生の多様性も描きだす。幼いコリンの好奇心と想像力は豊かで、他者を見つめる心には偏見がない。彼は社会のマイノリティーであるゲイに対しても率直に真摯に向き合う。高齢化と少子化が進む先進国では、子どももいまやマイノリティーの一部となりつつある。二種類のマイノリティーが、命という共通の課題を共有し戦っていく姿が描かれる。イギリス人の従兄アリスティアとの関係も面白く描かれており、両親のもとで従順に生きてきた臆病なアリスティアが従兄の願いを叶えるために、最後は大人というひとつの権力に立ち向かう姿もほほえましく描かれる。＜命＞が人々を区切る様々な垣根を越えて、人々を結ぶ物語である。自分本位な見方しかできなかった少年が、最後は弟を思いやる逞しい兄として成長する姿も巧みに示唆されている好作品である。

（3）本研究では、死生観教育のなかに読書を組み入れることの意義を明らかにするために様々な領域での先行研究を検討した。

ボウリーとタウンロー(1953)の指摘にあるように、子どもの言語能力は必ずしも彼らの抽象的思考レベルと比例しているわけではない。つまり子どもの内なる気づきに大人

は配慮し、彼らに討論の場をもたせ、子どもたちの高度な抽象的議論、言語表現能力が発達するように指導する必要がある。そこで読書が有効であると考えられる。ウルフによれば、読書をしている際にひとは認知プロセスを駆使しつつ「注意、記憶、そして、視覚、聴覚および言語のプロセス」を作動させている。読書のもつ総合的な知能の向上効果といってよいだろう。脳科学の見地から茂木(2015)は読むという行為が「自分以外の誰かの目線に立つことができるかどうか」という科学の重要な要素に他ならないことも主張する。科学の特徴といわれる客観性や検証能力はつまるところ他者の視線からみる力であり、知性と感性の相乗効果が期待できるのが読書であるといえる。

読書がもたらす効用についてはすでに複合学際的なアプローチで研究されているが、一例として脳科学の観点からみると、読書には共感能力を育む効果があると報告されている。これは1990年代のミラーニューロンの発見により具体的に明らかになった。ミラーニューロンとは人間がある行動をとったり、他者の行動をみたときに脳で活動する神経単位のことを指す。ひとがある経験を読むと、あたかも自分もその体験を追体験しているだけでなく、同じ神経部位で刺激反応を示しているといわれている。他者の物語を読み、そこで描かれる他者の心情をはかっている際に、当事者と同じ脳のネットワークが引き寄せられ、作中に描かれる他者にみずからを重ね、同一化するプロセスが行われていることになる。

社会体験が大人と比べて乏しい児童生徒には、ノンフィクションの読み物よりもフィクションのほうが有効であるという報告が出ており、彼らが実体験に代わって多様な場面に遭遇し、そこで様々な知見を得ることが期待されている。先行研究には、フィクションを読むことの多い人のほうが他者への共感力がより高いという報告もあるように、文学作品（大衆文学やノンフィクションよりも純文学）を読むことは、社会の理解力、共感といった「心の理論」の軸となるものの数値を高めることが明らかにされている。つまり、他者が何を考え、感じているのかを察する能力がフィクションを読むことで高められていることになる。

読書をしているときの脳は、ほかの活動をしているときとは違う働き方をしているという指摘もある。例えば、視覚野に蓄積された過去の映像が引き出されて、場面のイメージが脳のなかにつくり出され、そこに考えを構築するというプロセスも加わるので、人間の持っている創造的な脳力が積極的に生かされるという。脳科学の見地から、酒井(2012)は読書によって培われる想像力の強化を主張する。酒井は受け取る「入力」の情報量が少ないほど、脳は想像して補うことから、聞いたり読んだりすることが想像力を高

めやすいと論じている。情報量が少ないということは「自分の言葉で考える」ことを促すことであり、読むということは「単に視覚的にそれを脳に入力するのではなく、足りない情報を想像力で補い、曖昧なところを解決しながら『自分の言葉』に置き換えていくプロセス」だという。同時に、出力が多いことも想像力を強めることになるため、読書と会話を楽しむことが想像力を高めることに役立つという。死生観教育の場面で読書を介してアクティブ・ラーニングを実践することの意義を裏付ける論考である。

読書によって引き起こされる想像力によって、読者はこの先起こりうることを見立て、他者の気持ちを配慮し、自分の置かれている状況や状態を俯瞰的にとらえられるようになる。想像力が「その場にはないもののイメージを思い浮かべる能力」(脇 2014)であり、「思い浮かべる対象は『もの』だけではなく、人間の感覚、感情、考えなども想像の対象」(脇 2014)なのだとなれば、読書を死生観教育に導入することによって異なる宗教や歴史をもつ人への配慮が個々人の想像力も加わってより一層高まることが期待される。

(4) 実際にどのように「それぞれ一人一人」のかたちで読み進めていけばよいのかを探るために文学理論の援用は有用である。とりわけ文字の世界を通じて、ひとは自らの力をもって、文字の世界を再構築し、解釈していかなければならないという視座にたち、読者の役割を積極的に評価し、作品の意義・意味の構築は読者の存在が不可欠であることを主張する読者反応理論の見解は有益である。個々人の読者の心理が、読みの行為を通じてどのように変化していくのかを考察するために、本研究では文学理論のひとつである読者反応理論を検討することとした。

読者の個性を重視し、文学作品の理解を完全に個々人の自由な発想に任せるという主観を重視する論考では、読書行為における読者の認知について注目し、読むという行為が自発的なシンボル創生とその解読の繰り返しであると論じている。たとえば、美しい山を前にした瞬間、「美しい」と感じる瞬間はたとえ短くとも省察する時間となる。そしてこの「美しい」と感じることもそのものが個々人の評価を伴う。その山を愛でるのは、それが単に有名な山であるからではなく、それが「壮大で美しい」山であるからとなる。その時点で、我々は自発的に現実の山を記号やシンボルとしての山に転換させており、その記号化した山つまり「認知経験としての山」を評価していることになる。登山して目に映った山についてのちに他者に語るとき、もはやそれは実在の山ではなく、我々の知覚について語っているのであり、それは自分自身について語ることに他ならない。

これと同様のことが読書のプロセスにおいてもみられる。読書する時間のなかで、感

情や知性に導かれていくうちに、文字で織りなされたテキストは記号・シンボルへと転換する。我々はみずから創りだしたシンボルを我々の力で解釈する。作品というのは読者の心や読みがあつてこそ、成立するものである。何の変哲もない岩も、それを「美しい岩」と認知し、その美を解釈する者がなければ、美しいとは評価され得ない。本も読者の存在がなければ、ただの紙の集積体に過ぎない。作品は、読者によって読まれ、そして彼らの心の中で再生されて初めて「文学作品」となる。読者は読了した本について語るとき、みずからの知覚について語っているのであり、それは自分自身を語っていることとなる。

このような理論は連想するものやことがそれぞれ人によって異なることを重視している。そのため読んだことを語り合う「ネゴシエーション」と呼ばれる作業も必要になってくる。作品に反応し、そこに散在する記号を内在化し、そして再生産された文学作品について他者に語ることで、主観的な反応のうち何が他者に共有されて何が共有されていないのかが分かるからである。他者との会話から得られるものは「知識」として得られ、一つの作品に内在する豊かな表現や感性とそこから得られる想像力が共有されていく。このように読者反応理論は概して読書を通じて読者が得る啓発・気づきに着眼している点が大きな特色となっている。

(5) 本研究では日本ではあまり紹介されていないイギリスの死生観教育の事例を、文献資料を介してではあるが、紹介した。他国の例を紹介することは、日本の児童生徒への教育と援助を考えていくうえで示唆に富む。イギリスでは現在移民の問題やテロリズムの問題など、生と死をめぐる複雑で難しい問題が山積しており、死生観教育の重要性がより一層認識されることと考えられる。死生観教育そのものは複合学際的なアプローチで成立するものであるが、今後も本研究は喪失の問題をさらに深く掘り下げつつ、読書のもつ効用についてより一層考えていきたい。

<引用文献>

泉順子「王室とメディア」『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010 年』(慶應義塾大学出版会, 2011), 253-267 頁。

Bowley, A., and Townroe, M. *The Spiritual Development of the Child*. London: Livingstone, 1953.

Great Britain. Dept. of Education and Science. Education Reform Act 1988. London: HMSO, 1989.

Clark, Valerie. "Death Education in the United Kingdom." *Journal of Moral Education* 27.3 (Sep. 1998): 393-401.

Higgins, Sian. "Death Education in the Primary School." *International Journal of Children's Spirituality* 4.1 (1999): 77-90.

Rowling, Louise, and John Holland.
“Grief and School Communities.” *Death
Studies* 24.1 (Jan/Feb 2000): 35-50.

Ward, Barbara. *Good Grief*. 2vols.
London: Jessica Kingsley, 1993.

ブラジミール・ジャンケレヴィッチ『死』
中澤紀雄訳、みすず書房、1978.

酒井邦嘉『脳を創る読書』実業之日本社、
2012.

茂木健一郎『頭は「本の読み方」で磨かれ
る』三笠書房、2015.

脇明子『物語が生きる力を育てる』岩波
書店、2014.

メアリアン・ウルフ『プルーストとイカ
読書は脳をどのように変えるのか?』小松淳
子訳、インターシフト、2014.

クリスチャン・キーザーズ『共感脳：ミ
ラーニューロンの発見と人間本性理解の転
換』麗澤大学出版会、2016.

Gleitzman, Morris. *Two Weeks with
the Queen*. Puffin Modern Classics, 2003.

Bleih, David. *Subjective Criticism*.

John Hopkins UP, 1978.

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

泉 順子 (Izumi, Yoriko)

明治大学・商学部・専任教授

研究者番号：30440134